

---

# first love

梓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

first love

### 【NZコード】

N8267A

### 【作者名】

梓

### 【あらすじ】

ある出来事から先輩からのイジメを受けることになってしまった主人公、遠藤杏。日に日にエスカレートしていくイジメに耐え切れなくなつて、とうとう泣いてしまった杏を慰めてくれたのは同じクラスの夏木涼だった。

私の名前は遠藤 杏。

私は学校で明るく振舞つて、みんなのイメージでは『元気な女の子』という感じ。

私はジブンージシンガナイ……。

ある日、私は部活のテニス部の試合でミスしまくりだった。それで、先輩たちに目え付けられて……。

それから先輩たちのイジメが始まった。

部活のときは顧問がないときは全員で無視されて、校舎内で擦れ違うときには「ウザイ」とか「死ね」とか

言われて、ラケットは折られるし、ボールは当たられるし……一日で

私の体は痣だらけになる。

終いには友達も私を避け始めた。

皆、自分が次のターゲットになるのが怖いのだ。

私はそんなイジメに屈しないようにと一ヶ月我慢をしていた。

けど、とうとうある日、辛くて誰もいない部室で泣いてしまった。すると、人影が急にすっと現れた。

「大丈夫？」

声をかけてくれたのは同じクラスの夏木涼。

彼はそう言って私の頭を撫で、私が泣き止むまでずっと傍にいてくれた。

私は嬉しかった。

泣き止んでお礼を言いたかったけど、彼の優しい手がなかなかそうさせてくれなかつた。

帰りは家まで送つてまでくれた。

その日から、私は彼のことが気になり始めた。

数日後にはその気持ちは確実に恋心へと変わっていて、気がつけば彼を目で追っていた。

彼はいつも目が合つたりすると、近寄つてくれて、笑顔で話しかけてくれた。

そんな日々が幸せだった。でも、やっぱリイジメは続いていてそれはそれで辛かつた。

でも、彼が笑いかけてくれるから私はもう泣かなかつた。

「先輩からのイジメってまだ続してるの？」

唐突に彼が聞いてきた。

どうしようか迷つたけど、嘘をついてもしょうがないので正直に話すことにして。

「そつか…」

彼は神妙な顔つきで何か考え出した。

「でもね」

そう言いかけて私は口をつぐんだ。

その後に続く言葉は、

「貴方がいるから私は平氣」

だつたから。

これはもう告白と同じような意味だから。

ジブンニジシンガナイ私にはそんな勇気はない。

それに勇気を振り絞つて、そんなこと言つたとしても彼が私なんかと付き合つてくれるわけがない。

それで気まずくなつて話せなくなるなら今のままでいい。  
他人以上恋人未満なこの曖昧な関係がいい。

「そうだ!!」

彼が何かを思い立つたように立ち上がつた。

「ど、どうしたの？」

びっくりしながら、彼を見上げると彼は笑顔で言つた。

「イジメをやめさせる方法を思いついたんだ！」

彼のイジメをやめさせる方法というのは、私があの試合でのミスを挽回するような実力を身につけて、先輩たちに私を見直させるというものだつた。

彼は小さい頃からテニスをしていて、ジュニアの大会で優勝したことがあるとかで私のコーチになつてくれると言った。こうして、私と彼の特訓が始まったのだった。

## 前編（後書き）

初めての投稿です。  
いろいろ文章がおかしいところもあると思うのですが、  
見逃してやつてください。  
それでは、評価などをお待ちしています。

彼との特訓が始まって早3ヶ月。

私はメキメキと上達して、今ではテニス部のレギュラーメンバー以上の実力になつたと思う。

これは彼が言つてくれたことだ。

「才能あるね」

と言つて笑つてくれた彼。

何よりも、誰よりも優しい彼。

私はそんな彼に恋をしている。

きっとこの恋が成就することはないけれど、こうして一緒にいられるだけで私は幸せ。

ふとした瞬間に言つてしまふやうになる。

「好き」つて。

だけど、そんなことをしてしまつたら私の支えになつてくれた彼はいなくなつてしまつだらう。

だから、この気持ちは絶対にヒミツ。

彼にも、誰にも。

ちょうど、3ヶ月目の日の練習が終わると、彼が私を呼んだ。

「もうそろそろ、大丈夫だと思うんだ」

「練習は終わり、つてこと・・・?」

「そう。どこかできつかけを作つて、先輩たちに君の実力を見せてやるんだ」

「……」

「どうかした?」

「これでお別れなんて嫌…」

「何言つてるの?」

「だつて、これで私たちの繋がりつてなくなつちゃう…」

「俺たちって友達なんぢゃないの?」

「え？」

「そう思つてたのつて俺だけ？」

「私なんかでいいの？」

「もちろん。俺たちつてもう友達だよな？」

「…うん」

言いたい。この瞬間に「好き」つて言えたら……。  
でも私にはジシンガナイ。

だから、言えない。

「どうかした？」

「ううん。ただ……」

「ただ？」

「すごく、嬉しかつただけ」

「そつか」

彼は照れたように笑つて、鼻の頭をポリポリとかいた。

「じゃあ、帰ろうか。今日は遅くなつちやつたし、送るよ」

「ありがとう」

私たちはどうやって先輩たちを見返してやろうか相談しながら、帰路についた。

そして次の日。

「先輩、私と勝負してくれませんか？」

テニス部の部長で、イジメをしていた中心的人物の芹沢セリザワ

ヨイ 唯先輩に

私は言った。

「すごくドキドキしたけど、私には自信があつた。

先輩に勝てるという搖るぎない自信が。

芹沢先輩の周囲にいた取り巻きの他の先輩たちが嘲るよつに笑つた。

「あはは、アンタ本気で言つてんの？」

「あんな初歩的なミスするアンタが唯に勝てるわけないじゃん」

「怪我して、泣くのがオチよ」

それまで黙っていた芹沢先輩が言った。

「いいわよ、面白そうじゃない。言つておくけど、私ジユニアの大

会で準優勝とかとったことあるから」

「私は優勝した人に教えてもらいました」

「フンッ！強がり言つちやつて」

「じゃあ、放課後テニスコートで待つてます」

「臨むところよ」

「ははっ、さすが唯」

「カツコイー！！」

取り巻きの先輩たち、いやその教室にいた全ての先輩が私の敵だった。

でも、私は負けない。

私には彼が…涼君がいるから。

そして、私は先輩の教室を後にした。

## 中編（後書き）

3部に分かれての連載ですが、今日で完結しそうな勢いです。  
杏の気持ち、読み取つてあげてください。  
感想お待ちしています。

そして、とうとう待ちに待つた放課後がやってきた。

コートでは、私と芹沢先輩が対峙している。

コート外にいるのは、全員芹沢先輩の応援に来ている先輩たち。

「審判はどうする？セルフジャッジでいく？」

芹沢先輩がニヤニヤしながら聞いてきた。

「俺にやらせてもらえますか」

そう言って、コートに入ってきたのは他でもない涼君だった。

「りょ、」

「涼！」

え？

「私の応援に来てくれたの？」

芹沢先輩の手が涼君の腕を触る。

「勘違いしないでください。俺は陰険なイジメする人なんて大嫌いだ」

「なつ！あれはあのコが・・・」

「俺は杏ちゃんの味方ですから」

その一言が嬉しかった。

その後の彼の笑みも。

「先輩、始めますよ」

呆然としている先輩を他所に、涼君は審判席に座った。

芹沢先輩は悔しそうにこっちを睨んでから、乱暴にラケットを持った。

た。

「サーブは？」

「アンタからでいいわよ」

芹沢先輩が私を見て言った。

「そのぐらいのハンデはあげるわよ」

見下した感じで芹沢先輩は言った。

「じゃあ、行きます」

「ザ・ベスト・オブーセットマッチ！遠藤サービスプレイ！」

サーブの体制に入る。

その頃、向こう側のコートではこんな会話がされていた。

「芹沢先輩、あんまり油断しない方がいいですよ」

「え？」

ヒュンツ

唯の隣を何かがものすごいスピードで抜けていった。まるで水を打ったように辺りが静かになる。

皆、息を呑んでその場を見守った。

「ファイフティーンラブ！！」

そんな中、涼の声だけが響いた。杏は自分の勝利を確信した。

「負けたわ…」

芹沢先輩が試合が終わつた後にそうポツリと呟いた。

「え？」

「ごめんなさい、今まで卑怯なことをして」

「あ、いえ…」

「もし、よければもう一度、テニス部に戻ってきてくれない？」

「…はいっ」

私と芹沢先輩は握手をした。

今、私は涼君と一緒に帰つている。

「しつかし…すごいね、杏ひやん」

「え？ なにが？」

「もう俺、負けるかも…」

「テニスのこと？」

「そう」

「ははっ、そんなわけないよ」

「それに、や……」

きゅうに一人の間にきまづい空気が流れれる。

「あのさ、杏ちゃん」

「え、なに?」

「俺さ、君のことが……」

今までジシングガナカツタ私。

でも、彼ということで私は自信が持てるようになつた。

あれ以来、先輩たちは他の誰よりも優しくしてくれるし、友達も皆

元通りになつた。

本当に良かつた。

今、私は最高に幸せ。

だつて、隣にはあなたがいて、私の手をしっかりと握つていってくれるから……。

「ねえ、涼。私、あなたが大好き」

「知ってるよ」

彼はそう言って、優しく笑つた。

## 後編（後書き）

完結ですッ！！

初めての作品だったんですけど、どうでしたか？

近々、芹沢 唯視点で書いた番外編も出そうと迷っているので、そ  
つちの方もよろしくお願ひしますね。

それでは、評価をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8267a/>

---

first love

2010年10月12日03時07分発行